

# 14 いま、「共同」するこころをいかに

岸 清江（社会福祉法人杖中福祉会理事長）



## ◆ 父母による保育所づくり運動の波に乗って… ◆

一九七二年設立の杖中福祉会は、一九六三年誕生の「杖中共同保育所」がはじまりです。その共同保育所が発展して、いりなか保育園本園・分園、おおしま保育園、定員合計二〇六名の三園を運営するに至っています。

五五年半ばから七〇年代はじめにかけて、日本は高度経済成長期でした。戦後の混乱が過ぎ、産業構造の変化によって女性の職場進出が拡大し、看護師や教師など、専門分野でも就労が拡大しました。父母が働くための産休明けから預けられる保育所がない、時間も間に合わないなどの理由から、父母たち自らが共同保

育所を立ち上げ、「雨後の竹の子」のように広がりました。

## ◆ 保育も学習も父母と共同で …………… ◆

当時、この地にあった日本福祉大学の一室から誕生した共同保育所は、安住の場所を求めて転々とした後、大学の職員住宅のある敷地に粗末でも自前の共同保育所として存在していました。私は六〇年代後半、ある意味安定した状態の共同保育所に就職しました。就職の試験は父母による面接のみ。国語の教師だったお母さんが主な面接官でした。とにかく長くつづけてほしいという父母の願いを強く感じたのを覚えています。子どもは二〇人弱、保育者は四人で給食づくりの

パートさんがいました。職員会議は、ある保育者の三畳一間の下宿で週に一回合宿しておこないました。仕事が終わった一八時すぎから食事をし、はじめは必ず「歌」をうたいました。会議は子どものようなすや出来事の確認、そして学習。寝るのは夜中という日程でしたが、よくもつづいたものです。

また、当時、共同保育所の保育者たちが月一回土曜日の午後、小児科の医師から学べる「子どもの健康学習会」と保育研究者も参加しておこなう「乳児保育研究会」を開催しており、土曜日の午後の保育は父母が交代で担当し、保育者を学習会に送り出してくれました。まさに学習保障も共同でした。

## ◆ 共同のなかで育ち合い、願いをかなえる …… ◆

以下は、一九六八年に発刊した『杖中共同保育所の記録』に収録された、あるお父さんの言葉です。「私は、共保が、父親である私に参加を強要するのにとまどい、抵抗したものです。しかし後は、はじめは最大の抵抗を感じた街頭カンパにも毎日参加したし、署名や物品販売で一軒一軒の家を訪問しました。異邦人に対して物言うような市の役人との交渉にいらだちました。保育所運動が実を結んで共同保育所の必要が全く

なくなつたあかつきでも、共保の特徴である父母が共に保育に参加するという形態だけは、何らかの形で残しておきたいです。私にとって自分をきたえてくれた人生学校としての現在の共保に感謝の念を禁じ得ないものであります」（共保：共同保育所）。

このお父さんは、妻に泣いて署名活動に参加するよう懇願され、やっと出かけた署名活動の場所で二時間間声も出せずに立ちすくんでいたという方ですが、私が就職したころには東山動物園の入場階段で、見物人を追いかけて署名をお願いする姿に感動したものです。父母たちが、会社や社会の地位や関係を越えてつながら、力を出し合うところが保育所でした。そのなかについて、共同することで自分たちの願いをかなえることができることを身体に感じ、未熟ながら育てられたいように思います。

園長として三七年、理事長として一一年が過ぎました。その間、三つの新園舎建設、山間部での山小屋づくりにとりくみました。どんな時代も、信頼しあい「共同」する営みがつづけられました。社会保障制度の解体が加速するなかで、今こそ「共同」することを実践していきたいと思えます。